
富士と初夢と

サラトガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

富士と初夢と

【Nコード】

N3620D

【作者名】

サラトガ

【あらすじ】

毛利家のお正月の話。ちょっとだけコ蘭です。

誰かに追われていた。街の光の届かない暗い路地裏、幾ら走っても追手との差は広がらない。寧ろどんどん縮まっていく。振り返ると、血走った目をした男が刃物を持っているのが分かる。角を曲がるとその先は行き止まりだった。最早逃げ場は無い。壁を背にして向き直ると、もう目の前まで来ていた男は、刃物を両手で持ち一直線に自分の胸元に……！！！！

（あれ、ここは……）
気が付いたら、そこは見慣れた自分の部屋だった。布団を押し上げて体を起こし、ベッドから足を下ろす。まだ頭はぼんやりしていたが、さつきまでの夢だったという事は理解できた。時計を見ると丁度朝の9時、もうそろそろあの二人も起きている頃だろう。とりあえず顔を洗おうと思い、部屋を出て洗面所へと向かった。

「蘭、起きたか。もう朝飯用意してるぞ」
顔を洗って居間に入ると、お父さんとコナン君はもう起きていた。お父さんは珍しく朝御飯の用意をしてくれていた。
（買ってきたおせち料理が並んでいるだけだけど）
「おはよう、蘭姉ちゃん。あけましておめでとう」
コナン君が早速新年の挨拶をしてくれた。今日は元旦、昨日の晩は一緒に年越しのカウントダウンをしてそれから寝たけど、コナン君の方が大分早く起きたみたい。お父さんはまだパジャマだが、コナン君はもう服も着替えている。

「ところでおじさん、機嫌良さそうだね。何かあったの？」

コナン君がお父さんに話しかける。言われてみれば確かにそんな風にも見える。朝御飯を用意してくれたのもそれが関係しているんだろうか。

「フフン、聞きたいか。実はな、今朝丁度夢を見たんだが……」

話を振ってもらったお父さんは、身振り手振りを使いながら得意げに語り出した。

「夢の中での俺は犯人を追跡しててだな、その犯人を富士山頂まで追い詰め、逃げ場を失った犯人が悪足掻きで飛び掛ってくるのを一本背負いで返り討ち。日本一高い所で見事事件を解決するって夢だ！ どうだ、凄い夢だろう？」

「それって、犯人を逮捕したのが凄いつて事？」

コナン君が不思議そうに聞き返した。

「バーロオ、昔から一富士二鷹三茄子っていう言葉があつてだな、初夢に富士山の夢を見るのは最高に縁起が良いって言われてるんだよ」

どうも縁起物の夢を見たから機嫌が良いという事が分かった。

「俺みたいな一流になると、ツキも太かったりするもんなんだが、ここまで出来すぎると怖いくらいだぜ。去年一年間で毛利探偵事務所は一気に全国区になったが、この分だと今年は一気にワールドワイドだな。ナーハツハツハ！」

お父さんは本当に嬉しそうに初夢の話をしている、でも私は一緒に喜べなかった。さつき見た夢の事を思い出してしまったから。お父さんののは犯人を追い詰めて捕まえる夢なのに、私のは追いかけてしかも刺される夢。去年は色々な事件に巻き込まれて大変な一年だったのに、今年はもっと酷い目に遭うんだらうか。そう考えると少し憂鬱になった。

「蘭姉ちゃん、何か元気ないね。どうかしたの？」

視線を下げると、コナン君が私の顔を覗き込んでいた。観察力があって、本当によく気が付く子だと思う。

「今朝、変な夢見ちゃったから。初夢が嫌な夢だなんて幸先悪いな
つて。でも大丈夫、気にしてないよ」

そう言つて精一杯の作り笑顔を見せた。たかが夢ぐらいでいちいち
心配させちゃ悪いと思つたから。

「蘭姉ちゃん、それ違つよ」

「え？」

「初夢つていうのは、一月一日の晩から二日の朝にかけて見る夢の
事なんだ。だから蘭姉ちゃんの見た夢は初夢なんかじゃないよ」

「あ、そういえば……」

言われてみれば確かにそう聞いた事がある。お父さんが初夢だと言
うのを聞いて、私も勘違いしていたみたいだ。

「オイ、一寸待て。それじゃあ俺の見た夢は……」

「富士山の夢、一日フライングだったね、おじさん」

「ふつ、フライング!？」

さっきまで浮かれ気分だったのが一気に冷めて、お父さんはガック
リとうなだれた。

「蘭姉ちゃん、おせち食べよ。美味しそうだよ」

「あ、そうだね。食べよつか」

おせちを食べながら私はある事を考えていた。どうも前にも、これ
と似たような事があつた気がする。一体誰に聞いたんだっけ? ど
うしても思い出せないのがコナン君に話しかけてみた。

「コナン君つて何でも知つてるよね。どこでそんな事知つたの?」

「えつと、その……新一兄ちゃんがそんな事言つてたから!」

「新一が? あ、そういえば……」

そうだ、あれは確か中学生の時。元旦に新一が家に電話を掛けてき
て、その時も私が嫌な夢を見た話をすると新一が「それは初夢じゃ
ない」つて私に言つてくれた。あの時と一緒だつたんだ……

「蘭姉ちゃん」

「何、コナン君?」

コナン君は私に微笑んで言つた。

「今夜は、良い夢が見れるといいね」
その一言が、何だか嬉しかった。コナン君は、観察力があってよく気が付いて、そして本当に優しい子だ。
(良い夢か。新一の夢が見れるといいな……)
その日は久しぶりに、日付が変わる前に早寝をした。何だか、良い夢が見れるような気がした。

翌日の朝、七時半に目が覚めた。まだ誰も起きていないと思ったけれど、居間に行くとコナン君がもう起きていた。

「お父さんは？」

「さっきまで起きてたんだけど、また寝ちゃった。富士山の夢が見れるまで二度寝するんだってさ」

それを聞いて思わず笑ってしまった。昨日フライングをした事がよっぽど悔しかったみたいだ。

「蘭姉ちゃんは、どんな夢見た？」

コナン君が急に夢の事を訊いてきて、ドキツとした。

「えっと……茄子の夢よ」

「ホント？ それ縁起物だよ、良かったね！」

コナン君は、自分の事のように喜んでくれた。私は慌てて話を変えようとした。

「コナン君はどんな夢見たの？」

「それがよく覚えてないんだ。何も見なかったのかも」

「そっか。それじゃそろそろ朝御飯にしようか。トーストでいいよね」

私は食パンを焼き、マーガリンをつけて二人分をテーブルに並べた。コナン君は美味しそうに食べていたが、私はぼんやりと考え事をしていた。頭の中にあるのは今朝に見た夢の事。

「蘭姉ちゃん、食パン冷めるよ？」

「あ、そうだね。今から食べる」
その後パンを食べ終わって服を着替えた後、自分の部屋に戻った。
その間コナン君とは殆ど会話も無かった。私は部屋に戻ると、ベッドに腰掛けて溜息をついた。さっき嘘をついた。本当は茄子の夢なんて見ていない。でも本当の事はとても話せそうに無かった。まさかあんな夢を見るなんて思わなかった……

思い出の場所、米花センタービル展望レストラン。ここで私は待ち合わせをしていた。大分早く来てしまったみたいだ。入り口の近くですっと彼を待っている。その時肩をポンと叩かれた。彼が来たんだと思っただけ振り返った。

「新一！……え？」
新一じゃなかった。似ているけど違う。背は私よりも少しだけ低くて、顔立ちはまだあどけない。そして眼鏡をかけている。

「コナン……君？」

「遅くなってゴメン。さ、入ろう」

そう言うと彼は私の手を引いて中へと入っていく、私もそれに続いた。外の景色が見える窓際の席に案内され、私達は向かい合わせに座った。目の前の彼が、真剣な面持ちでいるのが分かった。

「これ、僕から蘭に」

蘭姉ちゃん、ではなく蘭と呼ばれた。渡された物は、宝石付きの指輪だった。綺麗な緑色、多分エメラルドだろう。私が黙っていると、彼が口を開いた。

「出会った頃からずっと、蘭の事が好きだった。この想いを、いつか素直に伝えられたら……蘭、ずっと一緒にいよう」

「コナン君。私……」

返事の続きを紡ぐ前に、意識は現実へと引き戻された。

(何か、妙にリアルな夢だったなあ……)

元旦の朝に見た夢よりもよっぽど現実感があった。肩を触られた時の感触は、本当に現実のものかと思った。今より少し成長したコナン君、夢の中の彼は中学生ぐらいだっただろうか。

「中学生でプロポーズって、ありえないよね。でもコナン君ってませてるから、ひよっとしたらあるのかも……」

夢の中で彼に好きだと言われ、プロポーズをされた。そして私は……

「私、何て言おうとしたんだろう？」

途中で覚めてしまった夢。もし続きがあったら、どうなっていたんだろう。

(ひよっとして、OKだったのかな……)

夢の中の成長したコナン君はちよっとカッコよくて、今から考えても満更でもないような気がした。

「って何考えてんだろ。ただの夢なのに」

私は頭を振って、一瞬過ぎった考えを振り払った。しかしこの後、

あの夢の事を意識せずにコナン君と話せるようになるまで、大体三日ほど掛かるのだった。

(後書き)

初めまして、サラトガといいます。ここまで読んで頂いてありがとうございます。

この拙作は「小説家になろう」に初めて投稿したいわゆる処女作です。

本来3人称で書く方が自分には楽なのですが、敢えて1人称に挑戦しました。

原作でのコナンと蘭の関係が凄く好きで、この二人が中心の小説を書いてみました。

因みに冒頭の夢に出てくる男は「14番目の標的」で犯人だった、あの人をイメージしています(笑)

感想など頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3620d/>

富士と初夢と

2011年1月20日14時41分発行